

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

音声教育における非対面式のフィードバック

夏 蕊

2018年 3 月

第1章 序論

本研究は、音声教育実践において、非対面式のフィードバックのあり方を考察したものである。本章では、研究背景、研究目的と課題、用語の定義、本論文の構成について記述する。

研究背景では、本研究の問いに至った経緯について述べた。問題意識は筆者の学習経験・教育実習経験から生まれた。筆者は学習者、教育実習生、ティーチング・アシスタント(TA)として、ある音声教育実践のクラスに深く関わってきた。関わっているうちに、非対面式、非同期型¹の発音フィードバックのメリットと必要性を感じ、フィードバックのあり方を知りたくなった。しかし、先行研究を調べた結果、非対面式の教育において、継続の難しさなどの課題があることが分かった。また、本研究の調査フィールドとした音声教育実践は新しいもので、まだ研究される余地がある。特に、非対面式のフィードバックのあり方について、まだ解明されていないことが多い。

そこで、本研究では、ICTを活用した非対面式の音声教育実践を通して、教育実習生が行っていた非対面式のフィードバックの特徴、教育実習生がフィードバックを行う際の意識、学習者がフィードバックをもらう際の意識を明らかにすることを目的とする。本研究の目的を達成するために、以下の3つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定する。

RQ1：教育実習生が行っているフィードバックにはどのような特徴があるか。

RQ2：教育実習生がフィードバックを行う際に、どのような意識を持っているか。

RQ3：学習者がフィードバックをもらう際に、どのような意識を持っているか。

以上の3つのRQを踏まえ、フィードバックの特徴を分析し、教育実習生の意識と学習者の意識を比較しつつ総合的に考察し、音声教育における非対面式の発音学習支援について提言する。

第2章 先行研究

第2章では、本研究の研究テーマと関わるフィードバックに関する理論と研究方法、非対面式の教育、フィードバックに関する実践研究についてまとめた。その上で、本研究の位置付けを示した。

まず、フィードバックの定義と類似する概念を紹介した上で、川口・横溝(2015:168)

¹ 特定の時間や場所の制限がなく、自分のペースで学習を進めることができる学習形態のひとつである(eラーニング 2008)、本研究では、同時に学習しない学習形態を指す。

を参考にし、本研究におけるフィードバックは「学習者の発音に対する教育実習生のコメント」を指すことを説明した。また、Gass (1997) の言語学習モデルを援用し、フィードバックの有効性について記述した。

次に、本研究の研究方法を検討するために、Lyster & Ranta (1997)、横溝 (1998)、川口・横溝 (2005)、楊 (2006、2009) の分類方法を整理した。しかし、それらの分類方法はいずれも対面式のフィードバック向けであるため、非対面式に着目した本研究でそのまま使用するのとは不可能である。そこで、本研究では、それらの分類方法を踏まえ、新たな分類方法を検討すべきであることを指摘した。

続けて、フィードバックに関する実践研究 (戸田・大久保 2014、楊 2009 など) をまとめた。非対面式の発音フィードバックの効果が明らかになっているが、フィードバックの意識についてさらに詳しく研究する必要があると分かった。

さらに、先行研究を踏まえ、本研究の位置付けを、「ICT を活用した新しい音声教育実践における非対面式のフィードバックに着目した実践研究であり、学習者、教育実習生、TA という三つの視点からの記述を重視するもの」と示した。

最後に、本研究の意義として以下の 2 点を述べた。1 点目は、本研究の新しい分類方法を用いて非対面式の発音フィードバックの特徴を明らかにすることがフィードバックの理論研究に貢献できるという点である。2 点目は、質的に授業参加者のフィードバックの意識を明らかにすることで非対面式の発音学習支援に繋がるため、実践的意義があるという点である。

第3章 研究方法

第 3 章では、まず、調査のフィールドと調査協力者/調査者の属性を紹介する。次に、3 つの調査概要について記述する。

本研究の調査フィールドは、某大学院で開講されている日本語教育実践研究科目²の一つであり、「実践クラス」という大学院生の教育実習向けの実践授業と、「発音クラス」という学習者向けの発音学習授業で構成されている。

本研究では、次の 3 つの調査を行った。1) フィードバックのデータの分類、2) 教育実習生の意識を明らかにするインタビュー調査、3) 学習者の意識を明らかにするインタビ

² 日本語教育実践科目は授業と実習 2 つの部分からなる。授業は 90 分間の実践研究を行い、実習は学内の日本語教育研究センターで設置している日本語科目と連動し、授業参加やグループ・個人指導などを行う。

ュー調査である。本調査は2017年2月から4月にかけて実施した。調査協力者は「音声教育実践」に参加した教育実習生6名と学習者6名である。

第4章 フィードバックの特徴

第4章では、RQ1「教育実習生が行っているフィードバックにはどのような特徴があるか」を明らかにするために、各教育実習生が行っていたフィードバックのデータの分析方法と分析結果を記述した。

分析した結果、下記のことが明らかになった。まず、フィードバックの全体から見ると、以下、3つの特徴が明らかになった。1) フィードバックの回数について、一課につき複数回のフィードバックが行われている。2) フィードバックの指摘数について、毎回一定の数(平均2.32件/人)で指摘されている。3) フィードバックの構成について、共通のパターンがある。教育実習生が行っていたフィードバックには「挨拶、全体評価、指摘、練習指示」+適度に行われた「ラポール形成」という共通のパターンが見られた。

次に、分析対象としたフィードバック文ごとに見ると、下記の3つの特徴が分かった。1) フィードバックの内容について、単に音声項目についてフィードバックを行っていただけではなく、発音学習についても多くのフィードバックを行っていた。2) フィードバックの方法について、否定的フィードバックと肯定的フィードバックが両方使用されている。3) フィードバックの工夫について、間違った音声項目を指摘する際に、色付けなどの文字の強調、図式化などの視覚情報の工夫が行われていた。

第5章 フィードバックを行う側(教育実習生)の意識

第5章では、RQ2「教育実習生がフィードバックを行う際に、どのような意識を持っているか」を明らかにするため、インタビュー調査を実施した。分析した結果、以下の6点が明らかになった。

まず、フィードバックの全体から見ると、下記の2つのことが明らかになった。1) フィードバックの回数、構成、指摘数について、<非対面式の発音指導の経験がないので、教師の指導を受け、マニュアルを参照していた>という教育実習生の共通の意識が見られた。2) 一方、<フィードバックの回数と指摘数の適切さに自信がない>、<全期間中にマニュアルと同じモデルの使用に不安を持つ>などの意識も見られた。

次に、フィードバック文を見ると、下記の4つのことが明らかになった。

- 3) フィードバックの内容について、<伝わらなかったことを先にフィードバックする>、<聴覚印象を重視してフィードバックする>などの意識が見られた。
- 4) フィードバックの方法について、<非対面式で直接訂正が分かりやすい>、<指摘項目によるフィードバックの形式を変える>、<肯定的なフィードバックが必要>などの意識を持って、フィードバックの方法を選んでいたことが分かった。
- 5) フィードバックの工夫について、<フィードバックを伝わりやすくしたい>という意識を持って視覚工夫を多く行っていたことが分かった。また、<学習者のモチベーションを維持したい>、<継続してもらいたい>という意識を持って、情意面の工夫を行っていたことが分かった。
- 6) 教育実習生全員が<自分のフィードバックが伝わったかをいつも心配する>という意識を持っており、一部の教育実習生は<指摘の音声項目、フィードバック文の書き方、またフィードバックのタイミングは適切か自信がない>という意識を持っていたことが分かった。

教育実習生のフィードバックの意識に影響する要因として、教育実習生の外国語学習経験、日本語教育経験、音声教育観、教師の指導、マニュアル、他の教育実習生との学び合い、学習者への配慮、非対面式の発音フィードバックへの不安が挙げられる。

第6章 フィードバックをもらう側（学習者）の意識

第6章では、RQ3「学学習者がフィードバックをもらう際に、どのような意識を持っているか。」を明らかにするため、インタビュー調査を実施した。分析した結果、以下の6点が明らかになった。

まず、フィードバックの全体から見ると、下記の2つのことが明らかになった。

- 1) フィードバックの回数について<ちょうどいい>、構成について<分かりやすい>と意識を持っている。指摘数について、<ちょうどいい>と<もっと指摘してほしい>という意識を持っている。
- 2) 一方、<複数のフィードバックを利用することで教育実習生に負担をかける>と遠慮している意識も見られた。

次に、フィードバック文を見ると、下記の4つのことが明らかになった。

- 3) フィードバックの内容について、学習者は<発音学習の中で一番勉強になったのは指摘だ>、<発音学習の指示ありがたい>などの意識を持っている。

- 4) フィードバックの方法について、＜発音学習の機会があれば、フィードバックの方法は気にしない＞、＜直接訂正のほうがいい＞、＜肯定的なフィードバックが勉強にあまり役に立たない＞など、学習者によって違う意識を持っている。
- 5) フィードバックの視覚工夫について、＜必要性が低い＞という意識を持っており、情意面の工夫について、＜勉強意欲の向上に繋がり、ありがたい＞という意識を持っている。
- 6) 一方、学習者によって、＜ほかの人に自分の声を聞かせるのは恥ずかしい＞、＜よく発音を間違えて教育実習生に負担をかけた＞などの不安を持っている。

学習者の意識に影響する要因として、学習者の日本語学習経験、発音の到達目標、発音学習観、学習方法、教育実習生者への配慮、非対面式の発音フィードバックへの不安が挙げられる。

第7章 結論

本章では RQ の答え、RQ の答えを踏まえた総合的考察、日本語教育への示唆、今後の課題について記述する。

まず、RQ の答えについて述べる。前述どおり、第 4・5・6 章で RQ の答えが明らかになった。RQ1 については、第 4 章のとおり、教育実習生が行ったフィードバックの特徴として 6 点が明らかになった。RQ2 については、第 5 章のとおり、教育実習生の意識として 6 点が明らかになった。RQ3 については、第 6 章のとおり、学習者の意識として 6 点が明らかになった。

次に、総合的考察として、1) 教育実習生の行ったフィードバックと、教育実習生の意識の関連性、2) 教育実習生の意識と、学習者の意識の関連性、2 点を明らかにした上で、非対面式のフィードバックのあり方について、学習者、教育実習生、支援者のそれぞれの視点から考察した。

学習者の立場から見ると、非対面式のフィードバックによって、従来の非対面式の授業で指摘されていた継続の難しさなどの課題を超えて、発音学習ができる。学習者が期待しているフィードバックには、以下の傾向がある。1) 発音の間違いに対して指摘があること、2) 聴覚印象の視点から発音の間違いの説明があること、3) 具体的な点を褒めてくれること、4) 発音を直す方法、および発音学習方法を教えてくれること。

教育実習生の立場から見ると、従来の対面式の授業より、非対面式でフィードバックを

行うことは時間の制限がなく、フィードバックの内容をじっくり考えて、フィードバックの表現を推敲する余裕があり、経験者ではなくても十分対応できる。教育実習生が目指しているフィードバックには以下の傾向がある。1) 継続的に、同じ間違いに対して複数回のフィードバックを提供できること、2) 学習者の音声ファイルをもらってから、できるだけ早いタイミングでフィードバックすること、3) 緩和な表現で丁寧に問題点を適切なフィードバックの方法で指摘すること、4) 学習者の今後の学習を意識して、フィードバックのポイントを選ぶこと。

学習者・教育実習生を支援する立場から見ると、学習者と教育実践生のフィードバックの意識には、ずれがある。そのため、フィードバックのあり方は、学習者と教育実習生一人ひとりの意識に注目することでこそ明らかになる。教育は人と人の繋がりによって成り立つもので、ICT を活用した非対面式の教育においても、フィードバックのあり方を検討する際に、教育の形式を重視するだけではなく、人と人の繋がりを重視した教育の本質に目を向けていくべきである。人と人の繋がりに注目するためには、その教育空間の中に存在している教育の主体となる一人ひとりの意識を無視してはならない。したがって、非対面式の学習空間においても個人性を重視した場合、フィードバックのあり方はある一定のモデルではなく、フィードバックの主体によって異なり、フィードバックしている過程で変化する。これは、フィードバック主体一人ひとりの意識に注目することでこそ明らかになった。

以上の考察を踏まえて、日本語教育への示唆を 3 点挙げた。

- 1) 非対面式の発音フィードバックのメリットを活かし、より多くの学習者に発音学習の機会を提供すべきである。
- 2) 学習者と教育実習生側の意識ずれを重視し、よりよいフィードバックを行うために、フィードバックの形式面の工夫とフィードバック主体の意識面の支援が必要である。
- 3) 学習者をフィードバックの主体として捉え、フィードバックの意識のずれを認識した上で、学習者一人ひとりに合ったフィードバックを提供することを目指すべきである。

最後に、今後の課題として、以下 2 点を挙げる。

- 1) 本研究で明らかになった非対面式のフィードバックの特徴が、他分野にも当てはまるかどうか検証する。
- 2) 従来の対面式の音声授業のフィードバックのあり方と比較する。

参考文献

- 川口義一・横溝紳一郎（2005）『成長する教師のための日本語教育ガイドブック—Live!』
ひつじ書房
- 戸田貴子・大久保雅子（2014）「新しい音声教育実践における学習者の学び—オンデマンド
併用授業による発音学習」『早稲田日本語教育学』14-16、pp.1-18
- Lyster, R. and Ranta, L. (1997) Corrective feedback and learner uptake: Negotiat
ion of form in communicative classroom. *Studies in Second Language Acqui
sition* 19, pp.37-66.
- 楊帆（2006）「誤用訂正に対する意識—中国人日本語学習者と中国人教師の場合」『小出記
念日本語教育研究会論文集』14、pp.37-49
- 楊帆（2009）「日本語授業における誤用訂正に関する研究—中国の大学教室の訂正実態
と授業参加者の意識」東北大学大学院文学研究科博士論文
- 横溝紳一郎（1998）「発話矯正—コミュニティ・ランゲージ・リサーチ」日本語教育学会編、
凡人社
- 横溝紳一郎（1998a）「教師からの肯定的フィードバックに対する反応に学習者の多様性が
与える影響」『日本語教育方法研究会誌』5（2）、pp.2-3